世紀転換期フランスの史学論争 (二)

渡辺和行

目次

一 はじめに
二 実証主義史学への挑戦
(一) 社会学からの批判
(1) エミール・デュルケーム
(2) フランソワ・シミアン
(二) 歴史哲学からの批判
(1) 方法の探究
(2) シャルル・セーニョボス
(3) ポール・ラコンブ
(4) A-D・クセノポル（以上第七巻第三・四号）
(5) アンリ・ベール
(三) 歴史学と社会学との論争
(1) 実証主義史家の反省
(2) シミアン論文の反響（以上本号）
(3) セーニョボスと社会科学
(4) シンポジウム
三 ランプレヒト論争とフランス
四 むすび

8－2－225（香法'88）

(5) アンリ・ベール

ところでラコンブは、クセノポル批判を「われわれは決定的な *définitive* 歴史哲学を与えることを望む[66]」と記して結んだが、瑣末な考証学と化した歴史学に食傷し、もう一度、歴史に「全体の概念」(ラコンブ)を取りもどそうという空気が、たとえ一部にではあれ、醸成されつつあったことは重要である。それを大胆に提言したのが、ラコンブやクセノポルより一世代若いアンリ・ベールであった。

ベールは、ラングロワとセーニョボスの『歴史学入門』が刊行された一八九八年に、学位請求論文『知の総合と歴史学——哲学の未来に関する試論——』を公刊した[67]。本書は科学(=学問)の現状、とりわけ歴史学の現状にたいする不満と抗議の書である。ベール自身「これは信念の書である。それは現代の本質的な必要にかなっている」(67: p. 11)と述べている。かれの現状への診断は、「希望と目的もなしに集められた詳細な事柄は無意味と思われる。というのは、研究を鼓舞し導くための原理が欠けているからである」(67: p. 2)という文章に窺うことができる。この診断から生まれた処方箋は、「冷たい分析を生き生きとした総合に代える」ような「原理の研究」であった(67: p. 3, p. 16)。このように当時のベールには、歴史が価値をもつためには、歴史は一般哲学と結びつくべきであるという見解があったのである(67: p. 417)。原理や哲学の探究によってベールは、「歴史の曖昧な点を解明しうる」(67: p. 2)と考えるのである。なぜなら、かれにとって「真理への努力とは明晰さへの努力」のことであり、「真理の研究を嚮導する原理は、すべてを理解し、すべてを統一すること」であったからである(67: p. 8, p. 21)。われわれはここに、デュルケームの「指導的概念[68]」と同様のモチーフを見ないであろうか。

ベールは学位論文の執筆を、一八九二年七月から始めたと記している(67: p. vii)。かれが、「生の問題」を解きえない素朴実証主義を批判した文豪トルストイの『われら何を為すべきか』の一節[69]を、共感をこめて引用していること

にも窺知しうるように、この当時のベールには、「生の意味」や「生の問題」が、いわば強迫観念として存在していた(67: pp. 2-3, 17)。それはたんに、青年期に特有の心理状態が、半年後に而立を迎えんとするベールになお存続していたとして片づけうる種類の問題ではない。これは、ベールのライトモチーフを解読するうえで重要な点である。なぜなら科学の進歩がもたらした生の細分化や知の断片化にたいする根底的な批判が、伏在していたことを示唆しているからである。ベールが一八九四年に、『生命と科学――ストラスブールの老哲学者とパリの学生との書簡――』を著わし、また学位請求論文の結論部第三節の(二)が「アルザスの気球の上で。生命と科学」と題され、アルザスで気球遊びをしたときの自然と生命と学問についてのエッセーで論文を締めくくったところにも、かれが「生命と科学」の関係を重視しており、「生命と科学」の間にある溝を埋めようというかれのライトモチーフを窺うことができるのである。[70] かれが学位請求論文を、「テーズではなくて行為であり、いわば生の断片である」(67: p. 1)と位置づけた理由もそこにある。このようなベールの姿勢は一貫しており、一九二〇年から刊行された『人類の進化』叢書の序文の一節も「科学と生命」と題され、そこでは「科学と生命というこの公式は、その達成が望まれる理想の表明である」と述べられるのである。[71]

もっともベールのこのような考えは、ベルグソンの生の哲学や、ジョルジュ・ソレルの進歩批判と一脈通ずる思想傾向であり、この時代の一表徴でもあった。しかしベールが、実証主義の時代の子であったことを忘れるべきではない。ベールは、モーリス・バレスのような反主知主義者ではなかった。ベールは、実証主義精神や実証主義的方法を糾弾し、古典教育を擁護したアクシオン・フランセーズ系の文学者とは、その立場を異にするのである。[72] ベールは、生のエネルギーが知によって制御されること、「生は知のなかで開花する」こと、「男性的に理解される歴史学は、本能の荒々しい力を操縦するために必要である」ことを知っていたからである。[73] ベールが目ざしたのは、生の衝動が理

性（＝科学）を飲みこむことではなくて、あくまでも生の問題を解きうる生き生きとした科学であったからである。つまりベールは、生が知によって制御され、知は生によって息吹を与えられるという知と生の相補的関係を希求したのである。かれが歴史に注目するのは、ここにおいてである。かれにとって歴史は、「生命と科学の結び目」(67：p. 416)として位置づけられたからである。このような眼で歴史学を眺めたとき、哲学を忘れた素朴実証主義が抱える諸問題をベールは剔出しえたのである。

それでは以上のことを念頭において、ベールの伝統的歴史学批判、ベールの考える「新しい科学」とは何であり、それはどのような背景から生まれ、いかにして行動に移されたのかを検討しよう。

前述したように、ベールが「新しい科学」を考察するにいたった動機は、歴史学の現状にたいする不満と批判であった。それは歴史研究の専門化が、歴史の全体性を喪失させたことへの批判となって表われるのである。このような歴史学の現状への不満は、萌芽的には、一八九〇年に公表された書評論文に窺うことができる。[74] かれはそのなかで、一八八〇年代に出版されたムージュオルやブールドーその他の歴史論を読んだ感想を、「新しい科学がまさに誕生せんとしている」(74：p. 516) という言葉で要約した。「新しい科学」とは、方法を欠いた「関連のない事実ないし証拠のない一般論」(74：p. 517)に基づく科学ではなかった。「科学は方法が打ちたてられたときにのみ、確実な進歩をとげる」(74：p. 519) と考えるベールにとって、方法の問題を正面から論じたブールドーの姿勢は、細かい点では批判はあったが、基本的には共鳴しうるものであったのである。「観念と事実」や「哲学と考証」の結合を主張し、「歴史の科学的哲学」をめざしていたベールにとって(74：pp. 518-519)、ブールドーの方向は歓迎すべきものであったのである。ベールが学位論文の主題として選んだのも、科学的な歴史哲学を構築することであった。

ベールがこのような問題意識をもつにいたった背景として、高等教育の状況とエミール・ブートルーの影響という

二つを指摘することができるであろう。高等教育の状況は、歴史学が置かれていた状況を知るうえでも一考に値する問題であるが、詳細は別稿に譲るとして、要点のみ記しておこう。普仏戦争の敗北後、フランスの高等教育は、フランス諸学の復活によるフランスの再生を目的として再出発した。しかし初等・中等教育の改革と比べて、高等教育の改革は進捗を見なかった。このかんの経緯を、われわれは、高等教育局長であったルイ・リアールの証言によって知ることができる。[75] リアールは、ファキュルテ Facultés をユニヴェルシテ Universités に再編するのに尽力した一人であるが、その成果たる総合大学設置法が成立をみたのも、一八九六年七月のことであった。この法律によって、それまで孤立して存在したファキュルテ間に、教育研究組織としての有機的なつながりを生む機構上の条件が整備されたのであった。このように一八九〇年代に、制度面で「総合」の体制が用意されたのであるが、歴史学の状況は総合からはほど遠いものであった。たしかに一八九〇年代は、歴史学の制度化が一応の完成を見たときである。しかしそれとともに、歴史学の役割も変化していたのである。つまり、一八九〇年代には、一八七〇年代の歴史学に求められた共和主義的な国民作興という役割は色あせ、それに取って代わったのが、歴史研究の専門化という名のもとの細分化と断片化、すなわち詳細な事実の研究であったのである。ベールが『生命と科学』のなかで、「分析の大学」を「総合の大学」に変えることを主張したのも、このような文脈においてであった(72: p. 126)。かれは総合を放棄した過度の分析を批判したのである。総合のために意識的に努力する分析家こそ、称讃に値するのである(67: pp. 410-411)。

ベールにこのような問題意識を植えつけたのは、高等師範の哲学教授であったエミール・ブートルーである。ブートルーはデュルケームの先生でもあった。ベールとデュルケームはともに、学位論文をブートルーに捧げている。実証主義史学への批判を開始したデュルケームとベールが、ともにブートルーの門下生であったことは単なる偶然ではない。このゆえに、ブートルーが歴史の方法をどのように考えていたのかを知ることは、重要な問題となるのである。

というのは、デュルケームやベールが、ブートルーの素朴実証主義批判を継承したと推測されるからである。

われわれは、ブートルーの素朴実証主義批判を、かれが一八九〇年代に著わした作品のなかに読みとることができる。かれは哲学史の課題や方法を述べた一文のなかで、総合を犠牲にして「未刊のテキスト」の発見や「逸話」の探究に専念する歴史を批判し、「大量の孤立したテキストを投入し操作することではなくて、テキストの作者の思想にはいりこむこと」を要求していた。[76] さらにブートルーは、ベールの『歴史総合評論』の創刊号に「歴史と総合」と題する小論を寄稿し、歴史における分析と総合の関係について論じたのである。[77] この小論は、いわば新しい雑誌への哲学的援護というべきものであった。「歴史と総合」のなかでブートルーが批判の俎上にのせたのは、フュステル・ド・クーランジュの「一時間の総合のためには、一生の分析を必要とする」といった公式である。すなわち、歴史は分析に始まり、その分析が終わって初めて総合に取りくむべきであるという公式である。まず事実の一覧表を呈示し、ついでその関係を考察するというベーコン的な帰納主義や経験主義が批判に晒されたのである。なぜなら、帰納が普遍法則を定立する唯一の方法ではないからである。経験的方法の代表であったJ・S・ミル自身も認めたように、普遍命題を樹立するためには一例の考察で十分な場合もあるからである。このようにブートルーは、仮説を拒絶する帰納的方法ではなくて「仮説—演繹的方法 méthode hypothético-déductive」こそが、科学に飛躍をもたらしたのであると主張する（77：p. 10）。この主張に、ポール・ラコンブと同様の論理を看取することができるであろう。

分析と総合の関係についても、ブートルーはこれら二操作の同時性・相互性・連帯性・不分離性を主張する。そして歴史は、分析と結合した総合なしに済ますことはできず、総合には、「一般的見解や指導的概念」が必要であると結論されるのである（77：p. 12）。このような見解の背後には、事物を常に「全体を構成する部分として、かつ部分に分割しうる全体として」、「単と多、異と同との間の関係の認識」として捉える哲学があるのである（77：p. 11）。またブ

ートルーは、歴史の目的を「人間の記憶に残るに値すると特に考えられるある種の事実を資料のなかから抽出すること」に見いだし、「事実の種類分けの概念が明らかにされねばならない」と記した(77:p.11)。われわれは以上のブートルーの主張のなかに、「指導的概念」や事実の選択の規準の重要性を指摘したデュルケームやベールの主張を見ないであろうか。ともあれ分析と総合の関係についてのブートルーの考えは、ベールの学位請求論文のなかに、「科学はより完璧な総合のためにのみ分析するのである。……分析は総合に先行すると言うべきではない」(67:p.334)とか、「総合は分析を正当化するだけでなく、総合のみが分析を規定し制限する」(67:p.411-412)という表現で刻まれたのである。

以上の検討からも、ベールの歴史学批判の方向がおぼろげながらも浮かびあがるのであるが、かれが伝統的歴史学を指弾した書物によって、今少しく検討を重ねよう。[78] ベールは、過去の人間的諸事実を研究する歴史学が科学に高められるためには、歴史学も科学的認識の手続きに服さねばならないと考えていた(78:pp.iii-iv)。なぜなら当時の実証主義には、逆説的ではあるが、「科学は不足していた」(67:p.11)からである。ベールのなかには、歴史学も説明科学を目ざすべきであるという考えが、牢固として存在したのである(71:p.vi, p.6., 74:p.745)。この立場からベールは、科学を否定する伝統的歴史学を批判するのである。かれが伝統的歴史家としてとりあげるのは、既述のクセノポルのほかに、市井の考証家のタミゼー・ド・ラロックと大学の歴史家のルイ・アルファンである。ド・ラロックは典型的な考証家であり、細部や未刊の文献を偏愛し、書物と写本に取り囲まれていることに無上の喜びを見いだす文献収集家であった(78:p.vi, p.2)。文献研究それ自体は、歴史学の予備研究として不可欠な作業であるが、あくまでも準備作業でしかない。考証は資料を用意し集めるが、科学のみが資料を秩序だてるのである(71:p.6)。しかるにド・ラロックは、文献考証を自己目的とし、科学本来の目的を見失ったのである。ベールは述べている。「科学は一

般的なものへの関心が、特殊なものの研究を司るときにのみ進歩する」のに、「考証家は、多かれ少なかれ、歴史の狭い一角を耕すのみならず、隣接するあらゆる研究から歴史を切り離してしまう。分析は学際的な連絡を切断しがちである。総合のみがその連絡に必要な橋を架けるのである。」(78：p. 16) 分析は総合の土台ではあるが、ド・ラロックのようなたんなる事実の収集家は、非難の的になるのである。

ド・ラロックが在野の歴史愛好家であったのにたいして、ルイ・アルファンはボルドー大学に勤務する専門的歴史家であった。アルファンは中世史家として出発したが、一九一四年に『百年前からのフランス歴史学』[79]を著わし、史学史の問題に関心を移したところであった。それだけベールの眼光も鋭くならざるをえない。ベールが「ド・ラロックの一生は、崇高で模範的である」(78：p. 15) と記したように、かれのド・ラロックへの批判には暖かみが感じられたが、アルファンにたいしては手厳しかったのである。ベールはアルファンに代表される歴史家を、「歴史のための歴史家 historien《historisant》」と形容して批判を加えたのである。[80] 事の発端は、アルファンがベールの科学としての総合的歴史 l' histoire synthétique という定義に、疑問を提出したことであった。アルファンも歴史研究の専門化や細分化が、歴史の大筋 grandes lignes を見失わせる危険を指摘し、「導きの糸 un fil conducteur が必要である」ことを語っていた (79：p. 175)。そして社会学が、歴史家にとって多大な助けとなることも認めるのであるが (79：p. 176)、アルファンは「個々の事実の研究」(79：p. 179) に執着し、シミアンやラコンブが主張する歴史の科学的概念は、多くの支持者をもたないと記すのである(79：p. 180)。アルファンにとって歴史学は、何よりも「特殊の科学 science du particulier」であり、「諸事実をその個別性 particularité のなかで説明する」学問であったからである。したがってアルファンは、「科学的歴史」という語の濫用を戒め、歴史は、「資料の偶然によって提起される一連の仮説でしかない」と述べて、歴史における偶然を重視し、反復現象を研究する社会学との学際的協力には否定的であったのである (以

上78：pp. 19-20)。それにたいしてベールは、歴史における偶然的変化と論理的変化の双方を考慮すべきことと、社会学を「科学的歴史のなかに、総合のなかに取りいれる」ことを主張し(78：pp. 24-27)、「考証」と「歴史のための歴史」との相違を次のように記すのである。考証は、科学の成立にとって不可欠な材料を与える準備作業であり、この材料を欠く総合は形而上学ないし文学でしかない。この意味で考証と歴史的総合 synthèse historique とは対立しないが、考証だけでは不十分であり、分析は総合に向かう必要があるのである。しかし「歴史のための歴史」とは、「歴史の経験的様式のことであり、それは物語り、叙述し、陳述する。それは時に一定の説明を行なうが、その説明は手探りでなされたものであり、明確な方法にも解決すべき問題の明晰な認識にも根拠を置いていないのである。」(以上78：pp. 21-22, 30)

ここに、われわれは翻訳しがたい「歴史のための歴史」の定式化を見いだすことができるが、ベールが唾棄した伝統的歴史学とは、考証のみに、分析のみに満足する歴史と、「歴史のための歴史」であったのである。「歴史のための歴史」が全否定であるのにたいして、考証的歴史が半否定であることに注意しておこう。ベールが「考証」や「歴史のための歴史」を定式化したこの短い文章のなかに、われわれはアンチテーゼとしての全体史・問題史・社会科学的歴史といった「新しい歴史」への志向を読みとることができるであろう。

社会科学的歴史を志向するベールの立場は、かれのセーニョボス批判により明瞭に示されている。[81] ベールのセーニョボス批判は、既述のシミアンのセーニョボス批判より一年早いものであった。ベールはセーニョボスの社会科学概念が、統計学や経済学しか含まない狭い概念であることを批判し、「社会なる概念はかれには無縁である」と酷評したのである(81：p. 295, p. 301)。セーニョボスが社会学の役割を認めない理由を、ベールはセーニョボスの歴史観のなかに見いだす。セーニョボスの歴史観とは「事件史 l'histoire des événements」である(81：p. 297)。セーニョボス

は、政治史を中心に他の個別史を配列する通史を重視したのである。この立場から帰結されるのは、事件と個人の偏重であり、原因を社会構造のなかに探るのではなくて、個人の動機を心理学的方法で解明することであった。かくしてセーニョボスの方法は、「歴史の素材と解釈において主観的なものしか見ず」、結果的に「科学としての歴史の否定につながる」と結論されるのである（以上81：pp. 297-299, 302）。このように「伝統的枠組のなかで、諸事実を系列に配し、個人や民族の生活を物語ることは、科学的研究とは無関係なのである。なぜなら科学の属性は、一般化し、説明の諸原理を引きだすことであるから。」（71：p. 6. 傍点、イタリック）

ベールは一九世紀末には、前述したような伝統的歴史学批判の地平に到達していたと見てよいであろう。この立場からベールは、「新しい科学」を創造しようというのである。総合を放棄し、分析過多に陥った歴史学を凌駕する方法の探究へと、ベールは駆りたてられたのである。かれが科学的な歴史哲学を目ざして学位論文を執筆していたときに依拠したのは、エルネスト・ルナンである。かれの学位論文のタイトル『哲学の未来』が、ルナンの『科学の未来』（一八九〇年）を彷彿とさせるというだけでなく、科学と哲学の関係、人間的認識の総合としての哲学、分析と総合といった考えをベールはルナンから摂取しているからである。[82] ベールが学位請求論文のなかで主張する総合の方法は、必ずしも明確とは言いがたいが、その方法は、心理学や社会学にも開かれたものであり、形而上学ではないことを確認しておこう。[83]

ベールの歴史学批判を屢述すると、総合に達しない分析の空虚さや一般的視点と結びつかない事実の無意味さという欠陥を逸れるためには、全体的な見取図、科学的な歴史哲学、すなわち歴史の科学的総合が必要であるというものであった。分析と総合は、論理的に切り離すことができないのである。「歴史における総合は、歴史研究を導く理論と歴史の説明的構築という二重の形態で構成されるべき」であり、それは歴史に自然科学の猿まねをさせることではな

いが、隣接諸科学との協同を必要とするというものであった(67: pp. 418-419, 423-424., 78: pp. iii-iv)。これによって、物語る歴史ではなくて説明する歴史が可能となるのである。

以上のようなリセ教授ベールの歴史批判や提言は、大学の歴史家に受けいれられなかった。ガブリエル・モノーも、ベールの学位論文のテーマに共鳴し、ベールの才能の豊かさを認めつつも、ベールの依拠するドクトリンが不明確であり、かれの主張する総合が「新たな種類の折衷主義」であり、「ヘーゲル的一元論」であるとやや手厳しい書評をした。しかしモノーが、ベールに一貫して暖かい眼を注ぎ、ベールが始めた歴史学の革新運動に好意的であったことを忘れてはならないであろう。(84)

ベールが始めた歴史学の革新運動とは、『歴史総合評論』の創刊であった。一九〇〇年八月のことである。モノーが『史学雑誌』を創刊して歴史学の科学化を推進したように、ベールは『歴史総合評論』を拠点にして歴史の総合を目ざしたのである。ベールは『歴史総合評論』を、「歴史の統一を実現するための中心機関」と位置づけた。(85) この雑誌が、若手の歴史家や社会学者や哲学者のフォーラムとして機能したことは、今日では周知の事柄である。リュシアン・フェーヴルは「『歴史総合評論』の出現によって、歴史へのわれわれの関心は再点火された」と述懐している。(86) 歴史への関心を失って高等師範の文学科に在籍していたフェーヴルに、クリオの女神への愛着を呼びもどしえたことの意味は大きい。『歴史総合評論』がなければ、歴史家フェーヴルは誕生しなかったかもしれないし、少なくとも社会史学派の登場は遅れたと考えられるからである。

ベールは、このような重要な意味をもった雑誌を発刊するモチーフを次のように述べている。「過度の分析と過度の専門化と戦うために、また歴史学の理論的諸問題を深め、歴史家と哲学者の間に正常な関係を築くために、私は『歴史総合評論』を創刊した。(87)」ベールは、このような分析と専門化の悪習がフランスに広まったのは、一八七〇年頃から

であり、その元凶は、考証的方法への強迫観念とドイツ文献学への崇拝であったと考えている（85：p.2）。既述のように、過度の分析は考証それ自体を目的とする状況をもたらし、過度の専門化はディシプリンの細分化をもたらしていた。ベールも専門化を否定しない。かれはその必要性を承認したうえで、専門化が専門家を狭い一角に閉じこめ、その他一切のものへの興味を奪ってしまうことの弊害を指摘するのである（85：p.2）。その弊害の結果が、歴史研究の狭隘化と研究者の孤立化、細部のための細部に拘泥し満足する不毛で卑小な好奇心であった。[88] とくにそれは、政治的なものへの執着として現われた。その当時は「国王や偉人、戦争と革命が、歴史の本質をなし、……政治的事実は優越した価値をもつとみなされ、実際それは特権的性質をもった」のである（88：p.6）。こうして「事件史」としての政治史が歴史学の中心の座を占め、「人間生活の他の要素たる法・道徳・宗教・文学・芸術・哲学・科学・風習・信仰は、独自のディシプリンを構成していた」のである（88：p.7）。このような政治史しか意味しない歴史概念に広さと深さを与え、また歴史的現実にたいして広い視野と生き生きとしたセンスをもって、研究に有効な方向付けを与えるためにも、総合の必要性が切実に意識されてくる(88：p.10)。それは、ドイツ的な歴史哲学の復活によってではなくて、分析を利用し、特殊から普遍へと進み、一般化を志向する科学的総合によってのみ可能となるのである(85：p.2)。しかるに「科学的」と称する歴史家は、資料・事実・モノグラフィーしか与えない（87：p.xi）。しかもベールの主張は、専門的歴史家の耳には届かなかった。そこでベールは、かつてヴィクトール・デュリュイが既成の大学組織の外に高等研究院を作って学問の拠点としたように、自ら新しい雑誌を創刊して、年来の主張の実現へと行動を起こしたのである。

かれは、新しい雑誌の性格や目的を次のように記している。[89] ベールはまず、本誌が歴史の理論や方法を研究対象とすることを宣言する。このような歴史の方法を対象とする雑誌が創刊されたこと自体、歴史学が専門性を深め細分化

を強めてきたことの証左でもある。ベールのモチーフを離れて、歴史学雑誌の創刊年のクロノロジー[90]を長期的な視野から眺めると、歴史全般を対象とした雑誌から時代別・地域別・分野別・テーマ別の雑誌へと、歴史研究の専門化と細分化が進行してきたさまを窺うことができるからである[91]。ともあれベールの雑誌が目的としたのは、歴史の理論であり方法であった。かれが目ざしたことは、政治史、経済史、宗教史その他の個別史の共通点と相違点を明らかにし、方法的に成功している事例[92]を集めて省察を加え、考証による研究を比較し、その研究を深め統一しつつ総合に導くことであった(89: pp. 1-2)。そのためには、心理学や社会学との学際的協同が不可欠となる。その理由をベールは次のように説明する。かれはモノーのフランス歴史学への貢献を承認したうえで、たしかにモノーの時代には「早まった一般化やア・プリオリな総合の危険性」があったが、今日では一般化や総合が求められており、社会学の躍進はその証左であると述べる。なぜなら社会学は、「歴史のなかに社会的なるものがある」ことを明らかにし、常に「一般概念」を志向し、「歴史に哲学を再導入した[93]」(89: pp. 3-4)からである。さらに心理学の必要性については、「歴史的総合が結びつけるさまざまな仕事は、結局、心理学に到達するはずであり、社会の比較研究は、社会心理学に到達するはずである」(89: p. 6)と述べるのである。逆に言えば、歴史的総合は社会学と心理学を含むがゆえに説明能力をもつのである(88: p. 18)。このようにベールは、新興の社会科学との相互交流を主張したのである。

以上のように、ベールの基本的哲学は実証哲学であった。この立場から、かれは歴史の総合を主張したのである。かれの主張する科学的な歴史哲学とは、「実証的総合」のことであり、歴史学が諸科学全体と結びつき、実証哲学のなかに統合されることであった[94]。ベールおよび『歴史総合評論』のこのような方針は、デュルケーミアンの歓迎するところでもあり、『社会学年報』が『歴史総合評論』に注目し続けた理由でもある[95]。

このようにベールは、歴史的事実に経験的比較的な方法を適用するデュルケーミアンの方法が多大な利点をもつこ

とを認めるし、かれも「一般的なものしか科学ではない」と考えるのであるが、かれがブールドーやラコンブやデュルケーミアンと異なり、不変のもの、一般的なものと同時に、特殊なものの研究も主張していることを忘れてはならない（89：p. 4, p. 5, p. 7）。ベールが内観心理学を不十分と見なす点でデュルケームと一致するが、歴史の説明の道具として、デュルケームよりも心理学を重視し、「歴史心理学」や「社会心理学」の必要性について語ったり（67：p. 304, p. 423., 74：pp. 738-741）、「歴史的総合は、個体的なものと社会学的なものとをともに含む」（81：p. 302）とか、「生物学者は、個々の有機体の特殊性を無視している」（89：p. 6）と述べるのも、このような文脈と関連するのである。

以上のようにベールは、「歴史研究に基づく知の総合」（学位論文一八九九年版のサブタイトル）を目ざして行動を開始した。クセノポル、リッカート、ランプレヒト、ベルンハイム、クローチェなど、外国の歴史家や哲学者からの投稿はあいついだが、肝心のフランス国内の専門的歴史家の反応は鈍かった。ベールは一九〇一年に、フュステル・ド・クーランジュの未刊の草稿をフュステル夫人の許可を得て『歴史総合評論』に掲載し、歴史の方法についての議論を巻きおこそうと企てた。[96] その草稿は、ストラスブール大学（一八六二年）とパリ大学（一八七九年）の開講の辞であり、フュステル・ド・クーランジュが分析と同時に総合を志した歴史家であることを示していた。しかしこのベールの努力も、歴史家によって黙殺されたのである。そこでベールは、近代史学会（一九〇一年設立）が、歴史の高等教育組織の問題を検討する委員会を設けた機会を捉えて、フランスの高等教育機関に所属する専門的歴史家に、歴史教育や歴史の方法についてのアンケートを実施した。[97] このアンケートを提案したのは、実証主義史学の守護聖人ガブリエル・モノーであったという（86：p. 204）。質問事項は、歴史研究のための専門研究所は必要か、文学部と法学部の間にある溝をいかにして埋めるか、歴史学方法論の講座を設ける緊急性をどう考えるか、どんな種類の講義（公開講義・閉鎖講義・アグレガシオンの口頭試問用の講義・ゼミナール）をしているか、などであった。シーゲルが詳

細に検討しているように、このアンケートの結果は、ベールを落胆させた(86: pp. 204-210)。第一に、古文書学院、高等研究院、それにトゥールーズやモンペリエ、エックス、グルノーブル、ブザンソンといった大学の歴史家からの回答はなかったことである。第二に、回答を寄せた大半の歴史家が、歴史理論の問題を教授することに熱意がなかったことである。「尊敬される教授は、少なくとも二〜三年ごとに、最初の講義の数時間を方法の説明にあてている」[98]と述べたアンリ・オーゼルは、例外的な存在であった。このためベールは、方法の無視ゆえに「歴史の無批判的、前科学的な概念が存続している」(86: p. 209)と嘆くのである。

さらに一九〇五年、ベールは再び蹉跌をよぎなくされた(以下86: pp. 210-213)。この年、コレージュ・ド・フランスに歴史学方法論の寄付講座 Cours d'histoire générale et de méthode historique ができたのである。ベールは、重要な高等教育機関のポストを占めることによって、「知の総合」のための影響力を行使しうると考えた。これはリセ教授でしかなかったベールの夢想や野望ではない。ベールに矜恃があったことは言うまでもないが、当時、パリ大学区副学区長となっていた教育学者のルイ・リアールの支持もあったのである。ベールは、コレージュ・ド・フランスの文献学教授であったガストン・パリスに、自薦の手紙をしたため、働きかけを行なっている。しかしこの努力も報いられず、その講座の初代教授となったのは、『史学雑誌』の編集者ガブリエル・モノーであったのである。[99]

かくして、この時期のベールの努力は実を結ぶことなく終わった。かれの実証主義史学への批判は、方法のうえでも多数の専門的歴史家に反省を促すことはなかったし、制度化のうえでも、コレージュ・ド・フランスの地位の獲得に失敗したのである。[100] たしかに、ベールの行動は一頓挫をきたした。しかしベールの叫びは、いわば「荒野に呼ばわる者の声」ではなかった。かれの「総合への渇望 fringales de synthèse」(89: p. 6)は、漸次、若き学徒の共感を勝ちえてゆく。リュシアン・フェーヴルは一九〇五年から、マルク・ブロックは一九一二年から、ベールの雑誌に参加

する。[101] フェーヴルはのちに、『歴史総合評論』を「人間精神と統一を打ち砕くものすべてにたいする恒久的反乱であり、精神を仕切る壁にたいする恒久的反乱」であったと評した。[102] フェルナン・ブローデルも「アンリ・ベールは、多くの著作を通して、われわれに、うまずたゆまず、かれの『方法序説』を提示した」と記している。[103] このようにベールが蒔いた種は、確実に育っていったのである。「知の全体のなかで、歴史学の位置と役割を正確にする」(94: p. 3)というベールの目的は、隣接諸科学、とりわけ社会学との議論のなかで実践に移されるであろう。

(66) Paul Lacombe, "La science de l'histoire d'après M. Xénopol," *Revue de synthèse historique*, I (1900), 51.

(67) Henri Berr, *La synthèse des connaissances et l'histoire: essai sur l'avenir de la philosophie* (Paris, 1898). 本書からの引用は、本文中に注の番号とページ数を明記しておく。以下の文献においても同様である。なお筆者は入手しえなかったが、H. Berr, *L'avenir de la philosophie: esquisse d'une synthèse des connaissances fondée sur l'histoire* (Paris, 1899). は、本書の第二版と思われる。学位取得後、タイトルを部分的に変更して再出版したのであろう。

(68) Emile Durkheim, *Cours de science sociale, leçon d'ouverture* (Paris, 1888), pp. 28-29. 小関・川喜多訳『モンテスキューとルソー』所収(法政大学出版局、一九七五年)一九一～一九二頁。

(69) ベールが引用しなかった別の一節で、トルストイは、事実を選択する理論の重要性を主張し、「事実のみを研究する」という科学主義を批判しているが、この点も当然、ベールの琴線に触れたはずである。『トルストイ全集 26 われら何を為すべきか』原久一郎訳(講談社、一九五二年)一九三頁。ベールが引用している箇所は、同書、二〇九～二一〇頁。

(70) これは三〇年も前に、ガブリエル・モノーがドイツの学問にたいして感じたことでもあった。かれは科学の先進国であったドイツの科学が「生の輝き」を失っていることに、落胆を表明していたのである。普仏戦争後、約二〇年でフランスの学問もドイツに追いついたということであろうか。*Le Temps*, 5 septembre 1900, p. 3.

(71) Henri Berr, *En marge de l'histoire universelle*, t. I (Paris, 1934), p.x., p. 15.

(72) William R. Keylor, *Academy and Community*, pp. 204-207. 詳しくは、Jean Capot de Quissac, "L'Action française à l'assaut

de la Sorbonne historienne," in Carbonell et Livet dir., *Au berceau des Annales* (Toulouse, 1983).

(73) H. Berr, "Introduction à une histoire universelle," *Revue de synthèse historique*, XXX (1920), 33. この序文はすでに、一九一三年に印刷されていた。

(74) H. Berr, "La méthode statistique et la question des grands hommes à propos d'ouvrages récents," *Nouvelle Revue*, Nos. 63-64 (1890).

(75) Louis Liard, *Universités et Facultés* (Paris, 1890).

(76) Emile Boutroux, *Etudes d'histoire de la philosophie*, 3e éd. (Paris, 1908), © 1897, p. 8. なおデュルケームは、ブートルーから諸科学の自律性を基礎づける原理と、一つの総合はその諸要素によって説明しえないという基本原理を学んでいる(中久郎『デュルケーム社会理論』創文社、一九七九年、一一頁)。

(77) 以下のことについては、Emile Boutroux, "Histoire et Synthèse," *Revue de synthèse historique*, I (1900), 9-13.

(78) Henri Berr, *L'histoire traditionnelle et la synthèse historique* (Paris, 1921). 本書は、既発表の四論文を集めたものであり、ルイ・アルファンに関する論文は、一九一一年に公表されている。Berr, "Histoire traditionnelle et synthèse historique," *Revue de synthèse historique*, XXIII (1911), 121-130. を参照せよ。

(79) Louis Halphen, *L'histoire en France depuis cent ans* (Paris, 1914).

(80) ルイ・アルファンは第二次大戦後も、リュシアン・フェーヴルによって旧派の歴史家として激しく批判されることになる。Lucien Febvre, *Combats pour l'histoire*, pp. 114-115.

(81) H. Berr, "Les rapports de l'histoire et des sciences sociales d'après M. Seignobos," *Revue de synthèse historique*, IV (1902).

(82) Ernest Renan, *L'avenir de la science, pensées de 1848* (Paris, 1890), chs. 9 et 16.

(83) 約三五年後にもベールは、歴史の総合が社会学や心理学の発達の恩恵を被っていることを述べている。Berr, *En marge de l'histoire universelle* t.I, p. vii. なおベールの総合については、一九一一年に出版される『歴史における総合 La synthèse en histoire』のなかでさらに展開されるので、稿を改めて論ずることにする。

(84) *Revue historique*, LXX (1899), 98-99., LXXVII (1901), 375., XCVIII (1908), 90., *Le Temps*, 5 septembre 1900, p. 3.

(85) H. Berr, "Au bout de dix ans," *Revue de synthèse historique*, XXI (1910), 2.

(86) Martin Siegel, *Science and Historical Imagination 1866-1914* (Columbia University Ph D., 1965), p. 199.

(87) H. Berr, *La synthèse en histoire, son rapport avec la synthèse générale* (Paris, 1953) © 1911, p. xiii.

(88) H. Berr, "Au bout de trente ans," *Revue de synthèse historique*, L (1930), 10.

(89) H. Berr, "Sur notre programme," *Revue de synthèse historique*, I (1900).

(90) 『歴史問題評論』（一八六六年）、『歴史・文学批評雑誌』（一八六六年）、『史学雑誌』（一八七六年）、『宗教史学』（一八八〇年）、『フランス革命』（一八八一年）、『ブルターニュ年報』（一八八六年）、『外交史評論』（一八八七年）、『中世』（一八八八年）、『南仏年報』（一八八九年）、『近現代史評論』（一八九九年）、『古代研究』（一八九九年）、『歴史総合評論』（一九〇〇年）。Louis Halphen, "France," in *Histoire et historiens depuis cinquante ans*, t.I (Paris, 1927), pp. 153-154.

(91) Margaret F. Stieg, *The Origin and Development of Scholarly Historical Periodicals* (Alabama, 1986).

(92) ベールは一九一三年に、歴史的総合の成功例として、リュシアン・フェーヴルの『フィリップ二世とフランシュ＝コンテ――政治的宗教的社会的歴史の研究――』を挙げている。H. Berr, "Nouvelle série," *Revue de synthèse historique*, XXVII (1913), 2.

(93) ガブリエル・モノーも、歴史学と法学と社会科学の関係について言及したときに、「社会科学は、一方で、社会学によって哲学に触れ、かつ哲学と結びつき、他方で、公法・国際法・憲法などによって法学と結びつく非常に広範な領野をもつ」と述べた（傍点、筆者）。G. Monod, "Observations de M. Monod," *Revue internationale de l'enseignement*, XXXI (1896), 543.

(94) H. Berr, "Au bout de trente ans : la Revue organe du centre," *Revue de synthèse*, I (mars 1931), 4.

(95) Martin Siegel, "Henri Berr's Revue de synthèse historique," *History and Theory*, IX (1970), 328., cf., Jacques Faublée, "Henri Berr et l'Année sociologique," *Revue de synthèse*, XXXV (1964), 68-74.

(96) Fustel de Coulanges, "Une leçon d'ouverture et quelques fragments inédits de Fustel de Coulanges," *Revue de synthèse historique*, II (1901), 241-263. 渡辺和行「フランス実証主義史学成立の背景」『香川法学』第五巻第四号（一九八六年）六二～六四頁。なおデュルケームも、フュステル・ド・クーランジュを評価する一人であり、デュルケームの学位論文の副論文たるラテン語によるモンテスキュー論（一八九一年）は、フュステル・ド・クーランジュに献呈されている（Steven Lukes, *Emile Durkheim, His Life and Work : A Historical and Critical Study*, London, 1981 © 1973, p. 60.）

(97) L. Barrau-Dihigo, "Nos enquêtes, questionnaire sur l'enseignement supérieur de l'histoire," *Revue de synthèse historique*, VIII (avril 1904), 165-170.

(98) Henri Hauser, "Nos enquêtes" *Revue de synthèse historique*, X (1905), 35.

(99) Gabriel Monod, "La chaire d'histoire au Collège de France," *Revue historique*, XC (1906), 241-268.

(100) 一九二二年にもベールは、コレージュ・ド・フランスの後任人事に立候補したが、またもや失敗している。Martin Siegel, "Henri Berr et la Revue de synthèse historique," in Carbonell et Livet dir., *Au berceau des Annales* (Toulouse, 1983) 209-211.

(101) Lucien Febvre, "Les régions de la France IV : La Franche-Comté," *Revue de synthèse historique*, X-XI (1905)., Marc Bloch, "Les régions de la France IX : L'Ile-de-France," *Revue de synthèse historique*, XXV (1912). なおフェーヴルが『史学雑誌』に公表した最初の論文は、L. Febvre, "L'application du Concile de Trente en Franche-Comté," *Revue historique*, CIII-CIV (1910). である。

(102) Lucien Febvre, "Hommage à Henri Berr pour ses quatre-vingts ans," *Revue de synthèse*, XXXV (1964), 10. フェーヴルの祝辞は、一九四三年二月二日になされたものである。この祝辞は、字句の修正や部分的削除という手を加えられて、*Annales Economies Sociétés Civilisations*, VII (1952) に再公表され、*Combats pour l'histoire* にも収録されている。

(103) Fernand Braudel, "Hommage à Henri Berr pour le centenaire de sa naissance," *Revue de synthèse*, XXXV (1964), 17.

(三) 歴史学と社会学との論争

(1) 実証主義史家の反省

ベールの総合のための闘いは、後退を強いられたが、かれの主張がすべての実証主義史家にとって馬耳東風であったわけではない。社会学と歴史哲学からの批判に直面した歴史学も、その内部に変化の兆しを見せ始めていた。第一世代の実証主義史家であるG・モノーとエルネスト・ラヴィスの主張に、その変化の徴候を看取することができる。両者は言うまでもなく、歴史学の科学化や歴史教育の近代化に尽力した歴史家である。史料研究に基づく歴史学を推進したのが、かれらであった。しかもかれらは、一九世紀前半のフランス史学を、とりわけミシュレを知っている世代であった。かれらは一八九〇年にいたって、瑣末な事実学や政治史学にとどまる歴史学を批判する。かれらの旗幟

は鮮明であった。ラヴィスは一八九〇年に、「逆説的に聞こえるが……歴史においては普遍は特殊より確実である。というのは一人の人物についてよりも、国民についての方が間違いが少ないからである。灌木の茂みのなかで失われた視野 vue も、（その外では—筆者）全体を見渡すことができる。もっとも広い視野 horizons はもっとも明晰である」（傍点イタリック）と記した。[1] さらに八年後の一八九八年一一月に、ラヴィスはソルボンヌの歴史学専攻の学生を前にして、「歴史学は人間の活動の研究であり、その活動は、政治的、社会的、経済的、知的、宗教的、道徳的、審美的などのあらゆる形態で表明される」と述べるのである。[2] この歴史学の定義が、政治史的見地からのみ考えられたものでないことは明らかであろう。このラヴィスの一文を『歴史総合評論』が好意的に引用したのも、それが「包括的な定義」であることによるのである。

またモノーも、一八九六年四月に行なった講演のなかで、歴史学が新たに目ざす方向を次のように語った。やや長いが、重要な内容を含んでいるので、煩を厭わず紹介することにしよう。

私は、歴史家が社会科学の研究と教育とにおいて演ずべき非常に重要な役割をもつと、意識することを望むものであります。歴史においては、とりわけ人間活動のはなばなしくて反響を呼ぶが束の間の表示 manifestations を、すなわち大事件や偉人を重視することに慣らされてきたし、諸制度や経済的社会的諸条件という大きくて緩やかな変動を表面的にのみ指摘することに慣らされてきました。それらの変動は、人類の進化の真に興味深い恒久的な部分であり、ある確実さをもって分析され、ある程度、法則に還元しうる部分であります。真に重要な事件と人物は、特にこの進化のさまざまな時期の印しとして、表象として重要なのです。しかしいわゆる大半の歴史的事実が真の人類史に属するのは、海面に生じた波——光の作用によってすぐ色づくが、砂浜で跡形もなく砕け散る波——が、実は潮の深い絶えざる動きによるものであるような場合のみであります。……したがって次の

ことが重要です。第一に、歴史家にかれらの研究の真の目的である社会的、経済的、政治的歴史に多大な関心をもたせること、第二に、社会的、経済的、政治的諸事実をその起源と歴史的展開のなかで常に研究し、法則それ自体も、人類の進化全体の一部をなす社会的事実として研究することです。……すべては絶えず変化するが、しかし徐々にであり、革命すら外見的にしか革命ではなく、実際には革命も、漸進的発達の暴力的で痛ましい形態であることが納得されるでしょう。人間というものは、革命的でも反動的でもありません。過去は敬意をもって、現在は共感をもって研究されるのです。そして期待される未来の誕生に資する手段が、そこで探求されるのです。……社会科学のおかげで、哲学と法学は歴史学の分野で、いやむしろ歴史の方法の分野で手を結びあうのであります。と申しますのも、われわれの眼には、歴史学は科学というよりも方法であるからです。歴史学は、明確な限定された領域をもちません。歴史学は人間活動のあらゆる表示、すなわち戦争、外交、立法、芸術、文学、社会生活に適用される方法であります。おそらくこれらの多様な表示が、技術的、実用的、思弁的、審美的などのさまざまな見地から考察されるのでしょう。しかしその考察を科学研究としたいのならば、歴史的見地にこそ、身を置く必要があるのです[3](傍点、イタリック)。

以上のモノーの主張のなかに、大事件や偉人という表層的な歴史から、社会経済的な要因を考慮にいれた構造的な歴史への転換を読みとることができるであろう。デュルケームを連想させる「社会的事実」という表現や、「社会的、経済的、政治的歴史」という順に注意すべきである。それは、「政治的」なるものの相対的な地位後退を示しているのである。また波と潮の比喩は、モノーの歴史観を巧みに表現していると言いうる。この比喩に、「長期持続 longue durée」や「動かざる歴史 histoire immobile」といった考えの萌芽を見ることも可能である。事実、フェルナン・ブローデルも「事件史 histoire événementielle」は、「表面のざわめきであり、潮の力強い動きによってもちあげられる

波である」と述べている。[4] 偶然の一致にすぎないかもしれないが、実証主義史学の守護聖人とアナール史学の継承者とが同じ海の比喩を用いたことに、筆者は、啓示のようなものを、すなわち、学派の方法や境界を越えて、歴史の本質を直観的に把握しうる者のみに許される史的想像力というものを感じざるをえないのである。

ともあれ、社会科学の出現が、歴史家の一部に津波のような衝撃を与えたということである。この衝撃は、ラヴィスにとっても大であり、かれは新興科学を拒否せず、社会科学系講座の新設に好意的な教授の一人となった。[5] 第二世代の実証主義史家のセーニョボスが、一九〇一年に『社会科学に応用された歴史の方法』を著わしたのも、かれが歴史学と社会科学との関係を考察する必要性を感じたからこそであった。またすでに一八九九年に、フェルディナン・ロートも文学部と法学部の各ディシプリン間の壁を除去することや、歴史学と法学と経済学との間に密接なつながりを作りあげることを要求していた。[6] ロートのこの主張は、三〇年後のフェーヴルとブロックの主張と内容において同じものであった。[7] 先述のモノーの講演も、法律学・政治学・経済学・歴史学・哲学との関わりについて論じたものであるが、この時期、文学部と法学部とのディシプリンの間に学際的な関係を構築することが模索され始めていたことを看過すべきではないであろう。社会学を文学部と法学部のどの学部におくのかという争いも、このような気運を促した一因と考えられる。[8] つまりこの時期は、近代的な知の形成とともに、伝統的な学問体系やカリキュラムが修正を迫られつつあった時期なのである。したがって歴史家が、社会科学系の諸ディシプリンに目を向けざるをえない状況があったのである。アンリ・オーゼルもそのような歴史家の一人であった。かれが近代史学会の第一回大会（一九〇一年）で、社会学の演繹的方法には留保を示し、批判を中心とした歴史の方法を社会科学に浸透させる希望を述べつつも、「社会科学は歴史家にとって不可欠である」と語り、一九〇二年には、「社会的」という形容詞の多様な意味を整理し、社会科学の定義や分類について考察を加えたことも、歴史家にとって、社会科学との関係が不可欠なものと

意識され始めたことを示すものと言いうる。[9] かくして二世代にまたがる実証主義史家の一部に、反省の気運が生まれつつあった。歴史家と社会学者との論争の舞台が整えられつつあったのは、このようなときであったのである。

前節に見たように、ベールの行動はすぐには実を結ばなかったが、デュルケームの社会学のための闘いは、着実に前進していた。一九〇二年に、フェルディナン・ビュイッソンの後任として、ボルドー大学からソルボンヌへデュルケームが移ったことは、何よりもそれを証明している。[10] 社会学の攻勢が始まる。シミアン論文が、歴史学批判の先陣をきった。ついでデュルケームとフォーコンネとが、社会学の対象を再度明確にするという意図から「社会学と社会諸科学」を公表し、「社会諸科学の体系 systhème、集成 corpus」としての社会学という定義を提出した。[11] さらにこの論文のなかでデュルケームは、『歴史総合評論』の「常連中の常連」[12]たるポール・ラコンブと同様の「出来事 Événements」と「制度 Institutions」の二分論を展開し、制度の研究によってこそ、「歴史は物語的研究であることをやめて、科学的分析に移行する」と記して、伝統史学を批判するのである(11: pp. 486-487)。もっともこのような見解は、『社会学的方法の規準』の第二版への序文(一九〇一年)のなかでも述べられていた。そこでは社会学は、「諸制度およびその発生と機能にかんする科学」と定義され、[13] 偶然的事件の科学ではないことが明示されていた。デュルケームにとって「制度」とは、「集合体によって確立されたあらゆる信念や行為様式」(13: p. 43)のことであった。このように、この時期、社会学者による歴史学批判の奔出を見るのである。一九〇三年一二月から高等社会研究院[14] Ecole des Hautes Etudes Sociales で、社会学者が主宰した一連の講演会も、この線上に位置づけうるものである。講演会では、さまざまな社会科学や補助科学と社会学との関係が討議された。そして一九〇六年から三年間にわたって、歴史学の認識論的問題を論ずるシンポジウムが開催されたのである。それでは以下において、順にこの時期の論争を検討しよう。

(2) シミアン論文の反響

既述のシミアン論文「歴史の方法と社会科学」は、アナール学派にとって一種のマニフェストであった。フェルナン・ブローデルは、『年報――経済・社会・文明』（一九六〇年）に再録するにあたって、次のような短いコメントを付けた。シミアン論文は、一九三九年以前の教育を受けた人にはよく知られているが、この論文を、若き歴史家たちが半世紀の歩みを熟慮し、「本誌の目的かつ存在理由である歴史学と社会科学との対話をより良く理解するために、公表する」[15]と。今日のアナールを率いるジャック・ルヴェルも、『年報』の五〇年記念に際して、シミアン論文を、リュシアン・フェーヴルからエルネスト・ラブルースやジャン・ブーヴィエにいたる『年報』の思想に占める位置という点と、歴史家と社会学者との関係を考える一種の理論的母型 theoretical matrix という点で重要であると指摘している。[16] このように今日でも言及されることの多いシミアン論文は、当時もその論争的性格ゆえに、発表されるやいなや「白熱した議論を惹起し」[17]、大きな反響を呼んだのである。

このシミアン論文は、一九〇三年一月三日に近代史学会の月例会でなされた報告がもとになっている。[18] 勿論、シミアン論文に見られるかれの主張は、一九〇三年に突如として生まれたものではない。シミアンは一八九七年と九八年に、『形而上学・倫理学雑誌 Revue de métaphysique et de morale』の「社会学年報」欄を担当し、社会学的見地からの書評を行なっていた。かれの見解は、通俗的社会学を峻拒し、学問としての社会学をめざす書評活動を通じて形成されたのである。シミアンはこの書評欄で、ラングロワとセーニョボスの『歴史学入門』もとりあげている。『歴史学入門』は、フランスで初めて歴史の方法を論じた書物であり、古文書学院、高等研究院第四部、高等師範学校、ソルボンヌなどの代表的な高等教育機関で採用され教えられていたものである。[19] 哲学出身のシミアン[20]にとって、考証的批判を中心にしたこの種の書物は論じにくいのか、かれの筆は、一九〇三年の論文と比べるとやや生彩を欠いている。

シミアンは著者たちが、哲学者や社会学者が用いるタームや概念や問題設定に不信をもっていることを指摘し、歴史が、社会科学も自然科学も含めた科学の認識の一様式、一方法でしかないことを述べるにとどめているのである。[21] この時期のシミアンは、『自殺論』への書評に見られるように、[22] デュルケームと完全に見解の一致に達していたわけではなかったが、社会学の陣営に身を置き、『社会学年報』の協力者として名をつらね、[23] 歴史学批判のヴォルテージを高めていったのである。そして高まったヴォルテージが、セーニョボスの『社会科学に応用された歴史の方法』(一九〇一年)とアンリ・オーゼルの『社会科学の教育』(一九〇三年)にたいして、とき放たれたというわけである。なお、シミアンがセーニョボスに「もっとも詳細でもっとも破壊的」な批判をなしえたのは、かれが商務省と労働省の司書として大学外に職をもっていたことにもよるであろう。[24]

衝撃的なシミアン論文が公表されたすぐあとに、イギリスの産業革命史を研究していた二六歳のポール・マントゥが「歴史学と社会学」を『歴史総合評論』に発表して、シミアンの議論に棹さした。[25] マントゥは、いわば社会学への歴史の併合を主張するシミアンにたいして、セーニョボスの方法とは距離をおきつつも歴史学を擁護したのである。[26] マントゥはこの論文のなかで、歴史学と社会学との関係やそれぞれのディシプリンの特性について次のように述べた。まずかれも「一般的なものしか科学ではない」という自然科学的な見地から、「歴史は科学たりえない」と主張する。なぜならかれは、「特殊なもの、一回しか生じないものこそが歴史の領分である」と考えるからである。したがって「歴史とは、諸事実の年代的叙述以外のなにものでもない」し、「歴史は、常に、物語・叙述・描写であり続ける」と定義されるのである(以上、25 : p. 122)。

このように歴史的事象の個体性や特殊性を主張するマントゥの歴史観は、アンリ・ベールによって批判されたルイ・アルファンの歴史観に類似したものと見なすことができる。したがって、社会現象の法則を求め、日常的事実を研究

する社会学に、歴史学は吸収されてはならないのである（25：p. 123）。勿論、マントゥも歴史学と社会学との協力を説きはする。しかしその協力形態は、歴史現象を説明するために社会学理論を援用するといった体のものではなくて、「歴史学は社会学に貴重なドキュマンを提供しうる」（25：p. 134）というものであった。なぜなら「社会学は法則を定立する前に、諸事実を具体的多様性のなかで研究せねばならない」（25：p. 121）からである。すなわち、歴史家と社会学者は異なる課題をもつが、事実の認識方法という点で、社会学は歴史学の方法に依存せざるをえず、この意味で、歴史学は社会科学の基礎として重要な役割を演ずるというのである（25：p. 123, p. 127）。このようにマントゥは、歴史学が社会科学にデータを供給する基礎科学だと主張する点で、デュルケーミアンの主張に接近する。そしてかれは、歴史家に卑小な考証に留まらないように求め、シミアンによって批判された事実の伝統的分類方法や、個人の行為によって社会現象を説明する方法を棄てるように要請しもした（25：p. 127, p. 128, p. 140）。しかしかれは、歴史学と社会学とが固有のディシプリンであることを強調し、はたして「出来事」を考慮せずに「制度」の研究に取りくみうるのかと疑問を投げかけて、デュルケーミアンの主張と対立するのである（25：p. 131, p. 140）。マントゥにとっては、歴史学も人間の集合的生活の研究を目的とし、出来事も個人も制度も集団も歴史に属するのであった（25：pp. 121-122）。

もっともマントゥが、狭い政治史的歴史の弊を免れえたのは、かれがメロヴィング朝の法令やギリシアの碑文と同様に、出生や婚姻の統計・儀式を語る旅人の見聞記・住民の居住形態を示す地図・工業の分布をも等しくドキュマンと考える経済史家であったことによるであろう（25：p. 124）。この意味で、マントゥは歴史主義的な歴史観をもっていたとはいえ、フィールドとしていたのは新しい経済史であり、かれもやはり、歴史学の変貌という時代の空気のなかにいたと言うことができる。この空気を呼吸することによって、かれの名著『産業革命』[27]（一九〇六年）も生まれた

のである。マントゥがこのような状況にあったがゆえに、ジョルジュ・ルフェーヴルはマントゥの見解を「正当」と評しつつも、その主張にはやや言葉足らずなところも見うけられると記したゆえんでもある。[28]

マントゥ論文が発表されて二年後に、オーラールの弟子である近代史家のピエール・キャロンは、フランスにおける近代史研究の現状をサーヴェイした論文のなかでシミアンに言及した。[29] キャロンはシミアンが歴史家にとって重要な問題を提起したことを承認し、シミアンの言う「個人のイドラ」を退け、歴史家と社会学者との間の誤解をなくし、両者の接触を求めるのである(29: p. 272)。キャロン論文は、マントゥ論文のように「歴史学と社会学」との関係を正面から論じたものではなく、その意味では、マントゥ論文ほどの重要性は見いだせない。しかしキャロン論文は、今日のわれわれが「実証主義史学」対「アナール史学」という図式では、見おとしてしまう論点を含んでいるがゆえに重要と言いうる。

それは、かれがフランスの近代史家を保守主義学派と自由主義学派とに二分し、前者の学派の勢力がなお大きいことを指摘していることである(29: pp. 263-268)。キャロンが述べる二学派は、次のように整理されるであろう。保守主義学派とは、カトリック系の歴史家が中心となり、外交史学会や現代史学会を拠点とし、『歴史問題評論 Revue des questions historiques』や『歴史研究雑誌 Revue des études historiques』といった雑誌に集っていた。かれらはフランス学士院、アカデミー・フランセーズ、道徳・政治アカデミーの主流であり、その勢力は大きいのであるが、産みだす作品には、政治史・外交史・伝記といった歴史書が多く、しかもそれらは必ずしも学術的価値があるとは言えない代物であった。これにたいしてキャロン自身が属する自由主義学派は、フランス革命史学会、近代史学会、一八四八年革命史学会を拠点とし、『史学雑誌 Revue historique』・『近現代史評論 Revue d'histoire moderne et contemporaine』などの雑誌をもっていた。この自由主義学派は、資料的にも人的にも豊かではないが、専門的歴史家

を擁し、優秀な作品を産みだしている。自由主義学派は、経済史・宗教史・政治思想史・制度史などと取りくむことで政治史を相対化しつつあると、キャロンは評価するのである。というのも「歴史は視野を拡大することに多大な利益をもつ」(29：p.271) からである。

いわゆる実証主義史家が属するのは、自由主義学派である。シミアンが歴史学批判を展開したのも、自由主義学派の近代史学会の席であった。すなわち、歴史家と社会学者との方法論争とは、当時のフランスの歴史学界においては、なお少数派の自由主義学派の歴史家と社会学者との論争であったという現実である。しかもこの自由主義学派のなかから、新しい歴史家も誕生してゆくのである。つまり、多数派である保守主義学派の歴史を批判して学問としての歴史学の制度化に努めてきた自由主義学派も、世紀転換期に、社会学からの批判に晒されたということである。方法論争の背後には、社会学者によって論争相手にもされない多くの保守主義学派の伝統的政治史家がいたという事実を、閑却してはならないのである。キャロン論文は、そのことをわれわれに教えてくれるのである。それに本稿では直接触れることはできないけれども、自由主義学派の歴史家とデュルケーミアンがドレフュス派として連合していた事実も、銘記すべき事実であろう。つまり、科学の方法の領域では両者は対立したが、ケイラーやジェラールも述べるように民主主義の擁護という政治の領域と公民教育の領域では、共闘しえたのであった。(30)

以上のように、シミアン論文に端を発した歴史家と社会学者の論争は、シミアンが批判の対象としたセーニョボスを巻きこんで展開されてゆく。セーニョボスの主張については次節以降で詳論することにして、本節の最後として、異色なシャルル・ペギーに論及しておきたい。ペギーの主張が高等教育機関の歴史家に影響を与えたというわけではないが、シミアン論文の衝撃の大きさを示す例として、それを考えることもできるからである。当時、思想的メタモルフォーゼを遂げつつあったペギーは、「現代の歴史学と社会学にもたらされた状況について」(一九〇六年) という

やや冗長な一文を発表していた。[31] かれはかつては、行動的なドレフュス派として、パリ大学の文学部や法学部のドレフュス派の教授の講義を反ドレフュス派の攻撃から守るために警護にあたったり、[32] 実証主義史家の「モノーの生徒であることを誇りに思っていた」[33] ときもあった。しかしドレフュス事件が終息を迎える頃から、かれは「実証主義への反逆」(S・ヒューズ)を開始した。ペギーは、ドキュマンによって過去の複雑さが理解しうると考える歴史家の倨傲を非難し、過去の深い理解を犠牲にして無意味な細部に拘泥する歴史家の態度に不平をこぼし、自然科学の方法が歴史に適用可能であるという歴史家の主張を批判するのである。[34] つまりペギーは、瑣末主義に堕した史料実証主義も自然科学的な実証主義もともに非難したのである。

このようにシミアンからペギーまでの偏差を伴いつつも、世紀転換期フランスの「方法論争」は続けられたのである。

(1) Ernest Lavisse, *Vue générale de l'histoire politique de l'Europe* (Paris, 1927) © 1890, p. VI. 広瀬哲士訳『欧州政治史概論』(大正六年)二頁。引用したラヴィスの一文は、E・ブートルーとH・ベールも、その出所を明示していないが、「総合」を支持する歴史家の主張として引用している文章でもある。E. Boutroux, "Histoire et Synthèse", *op. cit.*, 11-12., H. Berr, *En marge de l'histoire universelle*, p. x.

(2) Barrau-Dihigo, "Nos enquêtes," *Revue de synthèse historique*, VIII (1904), 167.

(3) Gabriel Monod, "Observations de M. Monod," *Revue internationale de l'enseignement*, XXXI (1896), 543-544, 546.

(4) Fernand Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, tome I, 2eéd. (Paris, 1966) © 1949, p. 16.

(5) George Weisz," L'idéologie républicaine et les sciences sociales," *Revue française de sociologie*, XX No. 1 (1979), 92-93, 106.

(6) Ferdinand Lot, "Faculté de droit et Faculté des lettres, "*Revue internationale de l'enseignement*, XXXVII (1899), 369-370.

(7) *Annales d'histoire économique et sociale*, I (1929), 1-2.

(8) E. Durkheim, *Cours de science sociale* (Paris, 1888), p. 29. 小関・川喜多訳『モンテスキューとルソー』所収、一九二頁。

(9) A. Mathiez, G. Lanson, H. Hauser, "Société d'histoire moderne, "*Revue internationale de l'enseignement*, XLII (1901), 242-243., H. Hauser, "Des divers sens de l'adjectif social, "*Revue internationale de l'enseignement*, XLIII (1902), 22-26., H. Hauser, "Essai d'une définition et d'une classification des sciences sociales, "*Revue internationale de sociologie*, 10e année (janvier 1902), 22-41. この時期のオーゼルの問題関心を集約したものが、Hauser, *L'enseignement des sciences sociales : état actuel de cet enseignement dans les divers pays du monde* (Paris, 1903). である。なおオーゼルは、のちに、フェーヴルとブロックの『経済社会史年報』の編集委員として名をつらねる歴史家である（Roger Chartier et Jacques Revel, "Lucien Febvre et les sciences sociales," *Historiens et géographes*, février 1979, 435.)。

(10) とはいえモーリス・アルヴァックスも述べるように、「社会学は一挙にソルボンヌにおいて承認されたのではなく、教育学という狭い門戸を通してうけいれられたということ」を、忘れるべきではない。E・デュルケーム『フランス教育思想史』小関藤一郎訳（行路社、一九八一年）七頁。

(11) E. Durkheim et P. Fauconnet, "Sociologie et sciences sociales," *Revue philosophique*, LV (mai 1903), 465.

(12) Lucien Febvre, *Combats pour l'histoire*, p. 340.

(13) デュルケーム『社会学的方法の規準』宮島喬訳（岩波文庫、一九七八年）四三頁。デュルケームの歴史批判に論及したものに、中島道男「デュルケーム社会学における歴史学の位置とその意義」『社会学評論』第三三巻第一号（一九八二年）がある。

(14) この高等社会研究院は、一九〇〇年一二月に設立された。母体となったのは、私立の社会科学院 Collège Libre des Sciences Sociales である。一八六八年に創設された国立の高等研究院 Ecole Pratique des Hautes Etudes とは、まったく別の研究機関であるので注意されたい。高等社会研究院は、高等教育における社会科学教育の振興を目的とし、デュルケームやセレスタン・ブーグレも、ボルドーやモンペリエから講義のために足を運んでいる。William R. Keylor, *Academy and Community*, p. 166.

(15) *Annales, Economies, Sociétés, Civilisation*, 15e année No. 1 (1960), 83.

(16) Jacques Revel, "The Annales : Continuities and Discontinuities, "*Review*, I (1978), 11-12.

(17) Henri Berr, "Le débat entre sociologues et historiens aux Etats-Unis," *Revue de synthèse historique*, VIII (1904), 253. このベールの指摘は、シミアン論文が発表されて一年後という早い時期であることに注意されたい。

(18) *Revue de synthèse historique*, VI(1903), 1, n. 1. この時期の近代史学会の活動については、Pierre Caron, "La Société d'histoire moderne 1901-1904," *Revue de synthèse historique*, VIII (1904), 244-250.

(19) Madeleine Rebérioux, "Le débat de 1903 : historiens et sociologues," in Ch.-O. Carbonell et G. Livet dir., *Au berceau des Annales* (Toulouse, 1983), 219.

(20) 一般に『社会学年報』の中心メンバーは、哲学出身のノルマリアンが多く、逆に歴史学出身者は少なく、しかもその歴史家は重要な仕事をしていなかった。このことは、社会学が歴史学によって敬遠され、哲学からは好意的に迎えられたことと無関係ではないであろう。Philippe Besnard, "La formation de l'équipe de l'Année sociologique, "*Revue française de sociologie*, XX No. 1 (1979), 16-17., Victor Karady, "The Durkheimians in Academe," in Ph. Besnard ed., *The Sociological Domain : The Durkheimians and the Founding of French Sociology* (London, 1983), 76-78.

(21) François Simiand, "L'année sociologique 1897," *Revue de métaphysique et de morale*, VI (1898), 639-640.

(22) シミアンは、デュルケームの社会学概念に形而上学の危険性を見ているし、自殺統計の不正確さや、デュルケームの言う「法則」が非常に狭い土台に基づいていることを指摘している。*Ibid.*, 650-651.

(23) シミアンは、『社会学年報』の重要性を次のことに見い出している。それは「多様なディシプリンを専攻する人間集団が、実証的研究の必要性を痛感して集まり、豊富で実質的な批判によって社会学の現状を改善するため、かつ社会科学の全部門に真に社会学的方法を適用するために努力することで結合した」ことである。シミアンの希望は、社会学がいつの日か科学の仲間入りをすることであった。*Ibid.*, 653.

(24) Philippe Besnard, "The Epistemological Polemic : François Simiand," in Do., ed. *The Sociological Domain*, 248-249, 251.

(25) Paul Mantoux, "Histoire et Sociologie," *Revue de synthèse historique*, VII (1903).

(26) Jean Ehrard et Guy P. Palmade, *L'histoire* (Paris, 1964), p. 85.

(27) 邦訳されている。ポール・マントウ『産業革命』徳増・井上・遠藤訳(東洋経済新報社、一九六四年)。

(28) Georges Lefebvre, *La naissance de l'historiographie moderne* (Paris, 1971), p. 302.

(29) Pierre Caron, "Des conditions actuelles du travail d'histoire moderne en France," *Revue de sythèse historique*, XI (1905), 261-274. なおキャロンは、サニャックと共著で、Caron et Philippe Sagnac, *L'état actuel des études d'histoire moderne en France* (Paris, 1902). を出しているが、筆者は入手することができなかった。

(30) Keylor, *op. cit.*, chs. 9-10., Alice Gérard, "A l'origine du combat des Annales : Positivisme historique et système universitaire," Carbonell et Livet dir., *op. cit.*, 79-88.

(31) Charles Péguy, "De la situation faite à l'histoire et à la sociologie dans les temps modernes," in Do., *Œuvres en prose 1898-1908* (Paris, 1959), 991-1030.

(32) スチュアート・ヒューズ『意識と社会』生松・荒川訳（みすず書房、一九七〇年）二三五頁。渡辺一民『ドレーフュス事件』（筑摩書房、一九七二年）一一八～一一九頁。シャルル・ペギー『もう一つのドレフュス事件』大野一道訳（新評論、一九八一年）。

(33) Charles Péguy, *Œuvres en prose 1898-1908*, p. 952.

(34) Keylor, *op. cit.*, p. 202.

（続く）